

# 東京天台

平成二十年  
春彼岸号

発行所  
天台宗東京教区  
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22  
TEL.03-5785-3481  
寺本亮洞



多くの温かい志を頂いた

たすけあいの心  
私にできること

### ●東京教区托鉢

昨年暮れ、浅草寺において歳末助け合い托鉢が行われた。この托鉢は毎年十二月の初旬に行われ、参詣する信者をはじめ訪れた観光客からも多くの浄財を集めている。

托鉢とは修行を行う僧侶

に対し、一般の信者達がいめい心ばかりの食べ物や鉢に入れる。この行為は授ける側と受ける側のお互いの修行なのである。施す側は自ら貴重な食べ物を布施するのだ。出家の僧にとっては行の価値を知り、在家の人々にとっては仏教への喜捨の精神を培うこと。これが托鉢の原点なのである。

### ●ある男性の話

浅草寺での托鉢に、八回連続で参加し続ける都内在住の檀信徒、鴨志田茂さんに話を聞いてみた。

きっかけは何ですか？

「たまたま托鉢だったんです」近所の住職との日頃からの付き合いの中で仏教そしてそ

の実践に興味を募らせていた。そんな時、「歳末助け合いの托鉢をしてみませんか」と言われ、自然と浅草寺の門前に立った。

いつもどんな事を感じますか？

「毎回感じることは、教育の大切さかな。『有難う。頑張って下さい』と声を掛けられると、まだまだこの国も捨てたものじゃ無い。自分の子もこういう風に育てたいし又育てて欲しいと思う。だからこそ、親や家庭による仏教や道徳に対する教育というものをすごく大事なことで感じる」

そんな暖かい反応ばかりとは限らない。怪訝そうな表情をし、通り過ぎるだけの人もいる。様々な人々の行きかう場所で一人の托鉢僧として静かに立ち続けることは、それだけでもひとつの修行であるだろう。

### ●「誰かの為」に

ボランティアから始まる仏教

「歳末助け合い」や「義援金」等と掲げたボランテ



雨の中行われた仏教青年会の青山托鉢

シアの要素が入ると、自然と誰もが行える行となるのだろう。鴨志田さんは、「一人は難しいけど、僧侶の皆さまと一緒に出来る。終わったあとのあの清々しさを他の方々にも味わって欲しい」、さらに、「来年こそは般若心経を覚えたい」と語った。

托鉢に限らず何らかのボランティア活動に参加することで、「誰かの為」になる喜びを知る。これこそ伝教大師の唱える利他の精神そのものであるうし、こんな活動を好機に仏教への関心が高まることもあるだろう。